

< 研究報告 >

乳幼児をもつ 30 歳代女性の 乳がんに対する認識の特徴 — 計量テキスト分析から —

谷地和加子¹⁾ 木地谷祐子²⁾

1) 岩手県立大学看護学部 2) 元岩手県立大学看護学部

要旨

乳幼児をもつ 30 歳代女性の乳がんに対する認識の特徴を明らかにし、乳房自己触診の実施や乳がん検診受診行動の向上等の健康支援の示唆を得ることを目的とした。5 名に半構造化面接し計量テキスト分析を行った。上位抽出語は<イメージ><早い><若い>等であった。共起ネットワーク分析では、【乳がんは、年齢が若いと進行が早く、発見が遅れる悪いイメージのがん】【必要性を感じるものの、仕事と子育ての両立でハードルが高い乳がん検診】【子どもを産んだことで死にたくないが、身近な存在に乳がん罹患者がいないため意識が向いていない乳がん】【方法が曖昧な乳房自己触診と見せに行くのが嫌な乳がん検診】【自治体から費用の補助があれば、子どものためにも乳がん検診を受けるかもしれない】【子どもを安心して気軽に預けられる乳がん検診会場】が抽出された。SNS 等を活用し同年代で育児中の乳がん体験者を身近に感じる機会をもち、検診会場に託児を準備するなど乳幼児と共に検診ができる環境整備が必要である。

キーワード：乳がん，認識，乳幼児，30 歳代女性，テキストマイニング

はじめに

我が国における最新のがん統計によると、乳がんの罹患数は約 9 万人となり、その罹患数は年々増加傾向にある（国立がん研究センター，2021a）。日本女性の乳がんの罹患率は、40 歳代から 50 歳代にピークがあり、中高年世代の女性にとって重要な健康上の課題となっている。しかし、近年では 20 歳代や 30 歳代の成熟期・子育て期の若い世代にも乳がんの罹患が増えてきている。また、乳がんは早期発見や早期治療すれば 5 年相対生存率は 9 割を超え（国立がん研究センター，2021b）、長期生存が可能な疾患である。このように乳がんは早期に発見することが可能であるが、2019 年の乳がん健診の受診率は 47.4%（国立がん研究センター，2021c）と受診の目標達成率である 50% には至っていない現状がある。乳がんは予防が難しいため、女性自身が乳房自己触診法を実施したり、乳がん検診のための受診行動をとったりと、乳がん検診率

の向上が重要な課題である。

乳がんの早期発見を目的とした乳がん検診では、40 歳以上が受診推奨年齢となっているため、20 歳代から 30 歳代の子育て世代にあたる女性は、日本では乳がん検診の受診推奨年齢とはなっていない。この子育てをしている女性達が、受診推奨年齢前から乳がんについて意識を向けることは、女性の一生の健康やライフサイクルを考え自ら健康管理していく上でも重要な意義をもつと考える。

実際に、乳がんの罹患が増えてきている 20 歳代 30 歳代では、乳幼児を育てている女性が多い。また、晩婚化や出産の高齢化により、30 歳代後半でも年齢の低い子どもを育てている女性が増えている状況がある。そのような年齢の低い乳幼児をもつ女性は、家事や育児、仕事といった多重の役割を担い、多忙な日々を過ごしている。また、女性は、妊娠や出産を契機として、自己の健康を振り返ったり、健康への関心と理

解を深めたりする一方で、自己の健康に対する意識があっても子育ての忙しさで自分の健康や身体のことには後回しになることが多い。加えて、女性は健康への関心があっても、育児や仕事のストレスや子どもを預ける環境が少ないことにより、保健行動が抑制されやすい状況にあることが示唆されている（大島他，2011）。

また、30歳代の女性は、妊娠・出産時期と重なり、妊娠期乳がんが発見されることも少なくない。妊娠期乳がんの頻度は3000人に1人と、妊娠期に診断されるがんの中で最も多いがんの1つと推定されている（日本がん・生殖医療学会，2021）。妊娠期に乳房のしこりを感じても、妊娠により増大する乳房の変化と認識されることが多いため、乳がんの診断が遅れることもある。妊娠・出産に限らず、授乳時に乳房のしこりに気づく場合もある。産後から授乳期にある女性は乳房を自ら触れる機会もあり、関心の高まりが見られる。よって乳幼児をもつ女性は、妊娠・出産の機会があったり、乳房を自ら触診したり、関心が高まる機会があり、その時期を捉えた健康支援の有用性が示唆される対象と位置付けられる。

したがって、乳がん検診の受診推奨年齢まで達していない20～30歳代の女性が子育てや仕事をしながら授乳以外でも自分の乳房に関心を持ち、乳がんを早期発見できるよう若い年代から乳房自己検診や乳がん検診にも関心をもつことが重要である。

青年期後期の看護学生を対象とした乳房自己検診行動を妨げる要因に関する研究（日下他，2011）では、乳房自己検診を実施した者は非常に少なく、乳房自己検診を実施したことのある者の方が経験のない者よりも乳がん自己検診法に対する認識得点が高い傾向が示されたと報告している。日下他（2011）は、普段から健康や病気に関心があり学習者である看護学生であっても、講義で得た知識をもとに乳房自己検診行動につなぐ学生はほとんどいないことを述べている。同様に、青年期女性の乳房セルフケアに関する行動と知識に関する研究（黒田他，2006）においても、定期的に乳房自己検診を実施しているものは少なく、乳房セルフケアに関連する保健行動と乳房自己検診は関連し知識がある者ほど保健行動ができていたと報告している。山本（2020）は、大学生男女の乳がんに対する知識と意識行動を調査し、身近な乳がん経験者がいるものは知識や話し合う機会があるものの予防的受診行動にはつながっていないことを示唆している。つまり、青年期や大学生のAYA世代は、乳房自己検診などの

保健行動まで至っていない者がほとんどである。また、同年代の乳がん経験者と接する機会が非常に少なく、身近な乳がん経験者は実質、AYA世代の上の年代であるため、乳がんの罹患にはまだ年齢が早いと感じていることがわかる。医療機関で働く女性職員の乳がん検診受診率に関する研究（岩田他，2014）では、10歳代～60歳代を対象とし、30歳代では約3割が乳がん検診を受診していた。これは医療従事者を対象としていたため人間ドック等で乳がん検診の受診機会があったと推測される。しかし、岩田他（2014）の調査では、子どもの有無による影響や30歳代に焦点を当ててはいなかった。また、田中他（2020）の調査では、就労・母親世代の一般女性を対象とし乳がんに対する認識についてインタビュー調査を行っているが、子どものいない女性も半数以上が対象に含まれており、乳幼児をもつ女性に限定されていなかった。池田（2020）は、乳がん検診受診行動の阻害因子は年齢の低さ、乳がんや乳がん検診の知識、受診のための時間調整の困難感などが抽出され、妊娠や出産、授乳のため乳がん検診を受けることができなかったと報告している。

以上より、先行研究では青年期の大学生や看護学生、医療機関の職員が対象であり、30歳代の乳幼児をもつ女性は対象とはなっていないことがわかる。そして、妊娠や出産、授乳をする年代の女性は、乳がん検診受診行動が阻害されていることが明らかとなっている。妊娠・出産年齢でもあり、乳がん検診の受診推奨年齢の40歳になる前の30歳代の乳幼児をもつ女性の乳がんに対する認識の特徴を明らかにすることは、40歳以降の乳がん検診の受診や乳房自己検診行動などの健康行動に影響を及ぼすと考える。わが国において高齢出産が増加している現代社会では妊娠や出産の年齢と乳がん罹患が増える年代が重なっている点を考慮し、乳がんの認識の特徴を明らかにし、乳幼児をもつ女性への健康支援の在り方を検討することは急務である。

そこで、本研究では、乳房自己触診の実施や乳がん検診受診行動の向上や健康支援の示唆を得るため、乳幼児をもつ女性がどのように乳がんに対して認識しているか、その特徴を明らかにすることを目的とした。

本研究では逐語録の分析に、内容分析の手法を元に開発された計量テキスト分析 KHCoder ver.3（樋口，2020）を使用した。計量テキスト分析とは、インタビューデータなどの質的データ（文字データ）をコー

ディングによって数値化し、計量的分析手法を適用して、データを整理、分析、理解する方法である（秋庭他，2004）。面接調査で得られた内容の分析手法に計量テキスト分析を採用した理由として、堤（2021）が指摘しているように、従来の質的研究法では分析者個人の経験や考えが結果に影響する可能性を排除できない点が挙げられている。つまり、計量テキスト分析を採用することにより分析者の恣意によって偏らない結果を抽出することが可能であり、信頼性と妥当性を確保することができる。看護分野においても、乳がん患者の心理に関する研究（大高他，2010）、看護学実習に関する研究（馬場他，2021）（贅他，2014）でも計量テキスト分析が用いられており、本研究においても質的データを客観的に分析することにより研究目的を達成できると考えた。

研究目的

乳幼児をもつ女性の乳がんに対する認識の特徴を明らかにし、乳房自己触診や乳がん検診受診などの健康行動の向上や健康支援の示唆を得ることを目的とした。

用語の定義

乳がんに対する認識：乳がんに対する考え、思い、知識とし、乳がん検診や乳房自己触診に対する考え、思い、知識を含む。

研究方法

1. 対象者

乳幼児をもつ20～30歳代までの日本人の女性とした。研究参加の同意が得られた方とした。ただし、現在、乳がん罹りに罹患し治療中である方、乳がんの治療が終了した方は除外した。

2. 調査期間

2021年6月～7月

3. 調査方法

1) 対象者のリクルート方法

研究参加の条件に合致した方で、研究者の知り合いからスノーボールサンプリング法を用いて、研究協力を得られた対象者から、研究参加条件に合った方の紹介を受けた。

2) データ収集方法

インタビューガイドを用いた半構造化面接においてデータ収集を行った。インタビュー時間は30分～60分までとした。インタビューは1人1回行い、対象者の同意を得て面接内容をICレコーダーに録音した。得られた録音記録から逐語録を作成した。調査項目は、対象者の個人属性として、年齢、乳がん検診の受診経験の有無・回数、家族背景、職業の有無の項目とし、対象者から聞き取りを行った。インタビューの調査内容は、乳がんに対する考えや思いと知識、乳がん検診や乳房自己触診に対する考えや思い、知識についてであった。

4. データ分析方法

逐語録の分析には、質的データに数値化操作を加えた計量テキスト分析 KHCoder ver.3（樋口，2020）を使用した。本研究目的を達成するためには、意味のある情報や特徴を見つけ出す分析手法として使用されている、計量テキスト分析が最良であると考えた。

分析の手順として初めに、対象者の語りを逐語録におこしテキストデータとした。次に、品詞別に単語を抽出し、単独では意味をもたない感動語「ああ」などを除いた。テキストデータを KHCoder ver. 3 を使用して単語頻度分析により主要語を抽出した。その主要語の関連性について共起ネットワーク図を作成し、共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワークにおける Jaccard 係数は、「.15 >」とした。Jaccard 係数は、同じ文章中に2つの語が同時に出現すると共起関係が強いとみなす。また、Jaccard 係数が1に近づくほど関連が強いとみなす指標である。次に、受診回数で対応分析を行い、受診回数に応じた回答の傾向の差異を探索した。計量テキスト分析においては、元のテキストデータに戻って確認を行う必要性が述べられている（樋口，2020）。本研究においても、研究者間でテキストデータを参照しながら解釈を試みた。また、分析過程において信頼性や妥当性を確保するため、研究者間で繰り返し検討した。

5. 倫理的配慮

調査対象者には、説明文書にて研究の趣旨および目的、研究参加の任意性と研究途中での中断の自由、途中で中断した場合でも不利益を被らないことを説明した。インタビューの中で語りたくないことは語らなくてよいことや匿名性の確保、データの保管や破棄について説明した。研究結果の公表についても説明した。

表 1. 対象者の背景

| 対象者 | 年齢 | 乳がん検診の経験と回数 | 家族背景 | 職業 |
|-----|---------|-------------|---------------------|----|
| A | 30 歳代後半 | なし | 夫, 子ども (幼児, 乳児) | 常勤 |
| B | 30 歳代後半 | あり 2 回 | 夫, 子ども (幼児) | なし |
| C | 30 歳代後半 | なし | 夫, 子ども (幼児, 乳児) 3 人 | なし |
| D | 30 歳代後半 | なし | 夫, 子ども (幼児, 乳児) | 常勤 |
| E | 30 歳代後半 | なし | 夫, 子ども (幼児) | なし |

本研究は、岩手県立大学研究倫理審査委員会の承認を得てから実施した (承認番号 311)。

結果

1. 対象者の背景

本研究の対象者は、乳幼児をもつ 5 名で、年齢は 35 歳～39 歳、平均年齢は 37.8 ± 1.6 歳であった。対象者の背景を表 1 に示した。全員が既婚者であった。全員が乳幼児を子育て中であり、1 歳未満～未就学児までの子どもと同居していた。2 名が仕事をしており、3 名は妊娠や結婚を契機に退職していた。1 名が正規での雇用時には定期的に乳がん検診を受けていた。家族や身内にがん経験者はいるが、乳がん経験者はいなかった。乳がん検診を一度も受けたことがない者が 4 名であった。

2. 単語頻度分析

乳がんに対する認識の内容について抽出された文脈は 659 であった。単語総数は 11198 語であった。出現回数の多かった抽出単語の上位 100 位を表 2 に示す。最頻出語の上位 10 語は、《受ける》《行く》《分かる》《人》《検診》《子ども》《自分》《乳がん》《見る》《イメージ》であった。

単語頻度の結果に基づいて、テキストデータ全体を通して出現した単語を概観すると、代表的な語りとして「見つかったらもう、何か進行してるみたい。～中略～(乳がんに罹るのは) 若いイメージがある。(A 氏)」、「乳がんって早い、若いうちのがんって早い。うん、がんっていうたぶんイメージがあるんですかね、そうかなと思います。(C 氏)」があり、《早い》《若い》《進行》《遅い》《見つかる》は乳がんに対するイメージを示す特徴的な語であった。

《受ける》《検診》《仕事》《ハードル》《高い》《お金》の語の代表的な語りとして「休日を使って、(子どもを) 預けてとかってなるじゃないですか。何かそのへんで結局、(受診の) ハードルが高くなっ

表 2. 抽出語リスト (出現回数上位 100 語)

| 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 |
|------|------|-------|------|
| 受ける | 54 | メンタル | 6 |
| 行く | 50 | 一時 | 6 |
| 分かる | 49 | 産む | 6 |
| 人 | 46 | 姉 | 6 |
| 検診 | 34 | 先生 | 6 |
| 子ども | 32 | 全部 | 6 |
| 自分 | 32 | 大きい | 6 |
| 乳がん | 31 | 痛い | 6 |
| 見る | 26 | 怖い | 6 |
| イメージ | 25 | 補助 | 6 |
| 若い | 25 | 亡くなる | 6 |
| 言う | 24 | チャンス | 5 |
| 結構 | 23 | 一応 | 5 |
| 感じ | 18 | 一緒 | 5 |
| 早い | 18 | 家族 | 5 |
| 託児 | 18 | 確か | 5 |
| 病院 | 17 | 健康診断 | 5 |
| 本当に | 17 | 嫌 | 5 |
| 来る | 17 | 検査 | 5 |
| 全然 | 14 | 高い | 5 |
| 意識 | 13 | 今日 | 5 |
| 触る | 13 | 今年 | 5 |
| 預ける | 13 | 子育て | 5 |
| 仕事 | 12 | 時間 | 5 |
| 聞く | 12 | 授乳 | 5 |
| 今 | 11 | 周り | 5 |
| 出る | 11 | 初めて | 5 |
| 多い | 11 | 症状 | 5 |
| 結局 | 10 | 触診 | 5 |
| 健診 | 10 | 人間ドック | 5 |
| 悪い | 9 | 生活 | 5 |
| 行ける | 9 | 働く | 5 |
| 市 | 9 | 乳腺外科 | 5 |
| 前 | 9 | 入る | 5 |
| 知る | 9 | 年 | 5 |
| 友達 | 9 | 必ず | 5 |
| お母さん | 8 | 普通 | 5 |
| 行う | 8 | 話 | 5 |
| 職場 | 8 | お願い | 4 |
| エコー | 7 | お金 | 4 |
| ハードル | 7 | リアル | 4 |
| 休む | 7 | レントゲン | 4 |
| 見つかる | 7 | 違う | 4 |
| 治療 | 7 | 一番 | 4 |
| 取る | 7 | 何となく | 4 |
| 受診 | 7 | 会社 | 4 |
| 進行 | 7 | 外科 | 4 |
| 大丈夫 | 7 | 簡単 | 4 |
| 遅い | 7 | 気づく | 4 |
| 予約 | 7 | 気持ち | 4 |

ちゃって。(C氏)、「検診のハードル高い、うん。それじゃなくたって子ども、例えば熱だって休みもらうことあれば。自分のことで仕事の休みを取ってまでって、なかなかならないです。(D氏)、「何かわざわざお金出してまで(乳がん検診を職場から離れた)病院でやるとかって。(A氏)、「ああ、やったことない。どうなんですかね。でも私、そうか、自己検診もありましたね。やってない、全然。(C氏)」とあり、乳房自己触診や乳がん検診に関する特徴的な語であった。

《子ども》《託児》《子育て》《妊娠》《授乳》の語の代表的な語りでは「授乳していると(乳房自己触診を)何かやりづらいですか、何かそういうのを何か見たことあって。結局その、こういう仕事してないタイミングで(乳がん検診に)行こうと思っても授乳期なんですよ、そのとき。(C氏)、「この子、妊娠しても飲んでたから、上の子が。もうエンドレス。うん、ね。何か授乳してると、そう、何かあんまり(乳がん検診には)行かないかもしれない。(A氏)、「子どもを気軽に預けられるところ。まあ、本当は託児があれば一番いいんだよね。(B氏)」とあり、対象者の年齢に特徴的な語であった。

《早いー若い》の共起関係は Jaccard 係数 .32、《遅いー見つかる》の共起関係は Jaccard 係数 .44、《仕事ーハードル》の共起関係は Jaccard 係数 .25 であった。

3. 共起ネットワーク分析

図1に共起ネットワーク全体を有向グラフで示す。視覚化された描画では、丸印(ノード)の大きさは単語の出現数の多さを表している。また、出現パターンの類似した共起関係の強い語が直線と直線で結ばれ、線の太さと色の濃さは関係性の強さを表す(樋口, 2020)。共起関係をすべて直線として描くと、描画がすべて直線で埋まってしまうことが多いため、描画する共起関係を一部の強いものに絞らなければならないとされている(樋口, 2020)。共起関係を強いものに絞るため、馬場他(2021)は、共起ネットワーク図の中から共起関係が2回以下の組み合わせを排除し、クラスターに分けている。本研究では、最初の分析段階で共起関係を強いものから絞っていったが、乳幼児をもつ30歳代女性の乳がんの認識の特徴を明らかにするためには、比較的弱い共起関係も描画に含めていくことでより探索を進めることができた。よって共起関

係が2回以下の組み合わせを排除せず分析したところ、6つの subgraph に分けられた。この subgraph を1つのグループとし、そのグループを破線で囲んだ(図2)。6つのグループのコード化は、共起ネットワーク分析の結果に基づいて逐語録を熟読して行い、共通する内容を要約するコードとして命名した。

グループ G1 は、《イメージ》《乳がん》《分かる》《若い》《早い》《進行》《見つかる》《遅い》などのノードで構成された。グループ G1 で出現した単語をテキストデータから探索すると、「何か著名人、結構よく乳がんになっているとか。そうですね。〇〇ちゃん(著名人の固有名詞)のイメージ。(A氏)、「(乳がんは)若いイメージがある。まれにいるよね、子育て組がいるね。(B氏)、「若いと進行早いし。(C氏)、「(乳がんが)見つかるのも遅かったりするから悪いね、悪いイメージ。(B氏)」などであった。これらのテキストデータより、乳がんに対するイメージは、子育て中の若い著名人が乳がん罹患して亡くなったことや、若い人が乳がんになると進行が早く、悪いイメージのがんと認識されていた。以上より、グループ G1 を【乳がんは、年齢が若いと進行が早く、発見が遅れる悪いイメージのがん】と命名した。

グループ G2 は、《受ける》《検診》《職場》《仕事》《ハードル》《チャンス》などのノードで構成された。グループ G2 で出現した単語をテキストデータから探索すると、「若いころなんて(乳がん検診を)意識してないですよ。職場もなし。人間ドックの補助は出るけど、がん検診とかそういう補助はなし。～中略～女性系のオプション付けたりするとやっぱり高くなるから。やってる人は毎年受けているけど、私、受けたことない。(C氏)、「職場で確実に、その健康診断みたいに、はいこれも受けてって付いてれば絶対(乳がん検診を)受けると思う。(D氏)、「今は仕事をしていなくて、子どももずっと見てる中で、まあ時間的にはチャンスだから受けたっていうのはあったんですけど、自分で予約して、あれしてっていうのもすこしハードルがあって。(C氏)、「結局その、こういう仕事してないタイミングで(乳がん検診に)行こうと思っても授乳期なんですよ。だからタイミングどうなんだろうと思いつつながら産休で終わっちゃうみたいなのが1人目、2人目であって。(C氏)、「仕事を辞めてから健康診断というものに行ったことがない。日程調整とかも面倒くさくて結局今に至る。(E氏)」などであった。これらのテキストデータより、

と認識されていた。以上より、グループ G4 を【方法が曖昧な乳房自己触診と見せに行くのが嫌な乳がん検診】と命名した。

グループ G5 は、《子ども》《自分》《病院》《行く》《市》《補助》《予約》などのノードから構成された。これらのテキストデータを探索すると、「まだ乳のみ子だから、自分がいなくなった後の子どものことを想像すると、何か耐え難いものがあるから、せめて大人になるまでね。だから自分で行かなきゃって思うけど、忙しいし、子どもを預けたりとかもあるし、何だかちょっと遠ざかって。(B氏)」、「自分で予約していくってことよりも、その市でこの日にやりますよ、のほうがね、ちょっと何か行きやすいというか。(C氏)」、「結局は、市とかの補助券みたいなものあるじゃないですか、そういうのが来ないと行動には移らないかもしれない。(E氏)」、「そんな子ども置いてまで検診をって思わないし。だけど何か、子どもがいるからちょっと受けとかなきゃ駄目かなっても最近は思うけど。べつに受けなくてもって感じはある。(D氏)」などがあつた。これらのテキストデータより、子どものことを考えると乳がん検診を受けた方がいいと思うが、子どもを預けたりしてまでも乳がん検診を受診する行動までには至っていないことがあきらかとなった。また、自治体から乳がん検診の補助券やクーポンが届くまでは行動には移らないとも語っていた。以上より、グループ G5 は【自治体から費用の補助があれば、子どものためにも乳がん検診を受けるかもしれない】と命名した。

グループ G6 は、《人》《託児》《預ける》《多い》などのノードから構成された。これらのテキストデータを探索すると、「子どもを気軽に預けられるところ。まあ本当は託児があれば一番いいんだよね。やっぱり(子どもを)預けに遠くまで行って、また来てってというのが結構私の中で面倒くさくて。(B氏)」、「子育て支援センターはあるから。でも遠かったりするから、そこに(子どもを)預けて受診して、また迎えに来てとか結構大変だから。それよりは(検診会場に子どもを)連れて行って、ちょっと預けて終わったら一緒に帰れるんだったら、全然受診しやすい。そのベビーシッター代を補助しますからどこか好きなどこに預けてくださいよりも、その検診会場に、自分で見れますもんね、うん、(子どもを)預けているときにね、様子が。(E氏)」などであつた。これらのテキストデータより、対象者は、子どもがいることで乳がん

検診の際に預け先を探したり、迎えに行ったりという行動が伴うことが面倒と認識されていた。子どもと一緒に乳がん検診の会場に行くことが子どもの様子を見ながら検診ができたり、気軽な預け先があることで乳がん検診の受診行動に結びつきやすいことが明らかとなった。以上より、グループ G6 を【子どもを安心して気軽に預けられる乳がん検診会場】と命名した。

4. 対応分析

検診回数と差異が顕著な語のうち上位 30 語を分析に使用した。対応分析の結果を図 3 に示す。語の位置はバブル(円)で示され、変数値の位置は正方形「□」で示される(樋口, 2020)。出現回数が多い語ほど大きいバブル(円)で描写される。検診回数を外部変数としたことから、「□」で示された変数は、「0」と「2」である。点線の交わっている場所が、横軸も 0 で縦軸も 0 という「原点」である。原点に近い位置にある語は、外部変数の値に関係なく、満遍なく出現している語を表している(樋口, 2020)。原点から遠くにある語ほど、何らかの強い特徴があつたと解釈できる(樋口, 2020)。図 3 では、《嫌》《多い》《悪い》《エコー》《見つかる》《怖い》などの語が原点から右上の遠くに布置されており、検診回数が 2 回の対象者に抽出された語であつた。また、検診回数が 0 回の対象者に特徴的な語であつたのは、《仕事》《休む》《意識》《市》などの語であり、原点から離れた左下に布置されていた。《若い》《早い》《子ども》の語は原点の近くに布置されており、外部変数の検診回数に関係なく出現していた語であつた。

考察

本研究は、乳幼児をもつ女性の乳がんに対する認識の特徴を明らかにし、乳房自己触診や乳がん検診受診などの健康行動の向上や健康支援の示唆を得ることを目的としていた。乳幼児をもつ 30 歳代女性の乳がんに対する認識の特徴において、語りの中から抽出された単語の特徴および共起ネットワークの 6 つのグループおよび対応分析の結果より考察していく。

1. 乳幼児をもつ 30 歳代女性の乳がんに対する認識の特徴

乳幼児をもつ 30 歳代女性の特徴語で多く抽出された上位語は、《乳がん》《早い》《若い》《人》《進行》などであつた。《早い-若い》《遅い-見つかる》

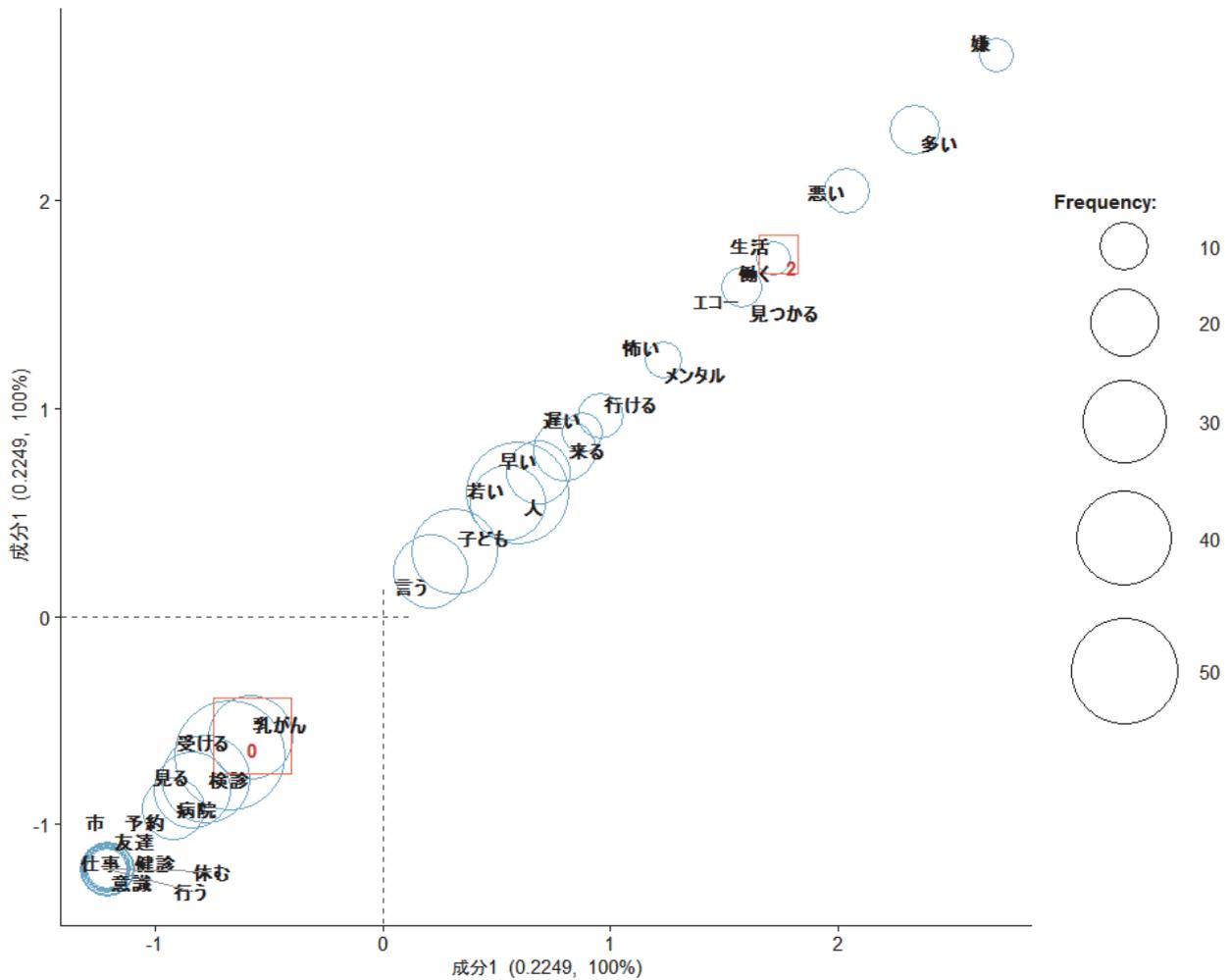


図3. 対応分析

は、強い共起関係であった。また、《早い》《若い》は対応分析による検診回数の外部変数に関係なく出現していた語であることから、対象者は、【乳がんは年齢が若いと乳がんの進行が早く、発見が遅れる悪いイメージのがん】と認識していたことが明らかとなった。これは、対象者と同じ年代の子どもをもつ若い年齢の著名人が乳がんになり、発見が遅れて亡くなったことが対象者の認識に影響を及ぼしたと考える。また、対象者は【子どもを産んだことで死にたくないが、身近な存在に乳がん罹患者がいないため意識が向いていない乳がん】とも認識していた。対象者は、著名人が子どもを残して乳がんで亡くなったことに衝撃を受け乳がんに対して一時的に意識が高まるものの、身近な存在に乳がん体験者がいないと乳がんや乳房自己触診、乳がん検診への興味関心は薄れてしまっていたと読み取れた。田中他（2020）は、就労・母親世代

の一般女性は、身近な存在の人のがん体験を通じて興味をもつが、乳がんを身近に感じていない場合、乳がんのことを話題にしたり、知ると怖くなるため自分で調べたりしないと述べている。本研究の対象者は乳がんの好発年齢の40～50歳代ではないため、田中他（2020）の研究結果と同様に、自分と同じ境遇にある同年代の母親は周囲に多いが、子どもをもつ乳がん経験者が身近にいない生活環境の中で過ごし乳がんのことを話題にする機会がほとんどないと推察される。また、30歳代であることから一般的に身体は健康であり、自身の健康問題を抱えている女性は少ないであろう。よって女性自身に何かしらの健康に問題があり医療機関を受診し、その医療機関で乳がんに関する情報を入手することも難しい。また、同年代の乳幼児をもつ乳がん体験者と話す機会も乏しいことも推察される。したがって、乳がんを【年齢が若いと乳がんの進行が早

く、発見が遅れる悪いイメージ】との認識はあるが、乳がんを現実的に身近な健康問題としては捉えていなかったと考える。

しかしながら、30歳代の子育て中の女性は、子どもを産んだことが契機となり、乳がんになり子どもを残して死にたくないという認識していたことも特徴であった。これは、子どものために生きていたい、母親として傍にいたいという感情とも読み取れる。この感情は、子どもに対する母性性とも言える。子どもに対する愛着の絆と母性性の形成は、同一の過程において相互依存し合いながら調整されるという (Rubin, 1984)。乳幼児をもつ女性に対して、子どものためにも生きていたいという肯定的な感情でもある母性性に働きかけることは、40歳以降の乳がん検診への意思決定や受診行動、乳房自己触診行動に有効なのではないかと考える。

さらに本研究では、乳幼児をもつ30歳代女性は【必要性を感じるものの、仕事と子育ての両立でハードルが高い乳がん検診】と認識していた。検診回数が0回の対象者に特徴語として、《仕事》《休む》《意識》などの語が抽出されていた。つまり、乳幼児をもつ30歳代女性は乳がん検診の必要性を感じているが、子育てをしながら仕事を休むことはハードルが高いと認識されていた。大島他 (2011) は、調査対象者の6割以上の母親が仕事や家事、育児といった他の生活行動を優先とし、自分の健康を後回しにする傾向であったと述べている。本研究の対象者は乳幼児を育てている年代の女性であるため、手のかかる乳幼児の世話で時間をとられたり、仕事で多忙であったりと生活行動が優先され、時間が十分にとれず乳がん検診などの行動は後回しになる特徴であったと考える。

一方、対応分析では、乳がん検診回数が2回の対象者の特徴語に、《嫌》《多い》《悪い》《エコー》《見つかる》《怖い》が抽出された。対象者は、【方法が曖昧な乳房自己触診と見せに行くのが嫌な乳がん検診】と認識しているように、検診のために乳房を見せることへの抵抗感があった。また、《見つかる》《怖い》の抽出語から乳がんを発見することへの恐怖心も抱いていたことも明らかとなった。乳がん検診の受診行動を規定する要因に、時間的制約や乳がんに対する恐怖、羞恥心を伴う検診への抵抗感が報告されており (森田他, 2020)、本研究結果とも一致していたと考える。しかし、乳がん検診回数が2回であった対象者1名の分析結果であるため、十分なサンプルサイズ

とは言い難くデータの偏りは否めない。今後は対象者を増やし分析していく必要がある。

乳房自己触診の方法は、30歳代の女性にとって曖昧に認識されていることも今回の調査で明らかとなった。40歳から乳がん検診の受診対象年齢となるため、30歳代では乳房自己触診を実施することで乳房への関心や乳がんへの意識の啓発につながり、乳がんの早期発見につながる。女子大学生が乳がんの自己検診を実施しない理由としても、対象者の7~8割が「やり方がわからない」を最も多く挙げられ、「自己検診の指導をしてほしい」「自己検診の方法を確認してほしい」などのニーズが挙がっていた (的場他, 2017)。大学生から乳房自己触診の方法を教えられる機会が乏しく、30歳代になっても正しい乳房自己触診の方法を教えられる機会がないため、乳房自己触診の方法が曖昧に認識されていたと考える。したがって、女性のライフステージに合わせて、30歳代の女性には子育て教育や支援と合わせて、乳房自己触診の方法を教えたり、乳幼児健診時に合わせて乳房自己触診の方法の映像を流す、あるいはコーナーを設けるなどの工夫が必要である。

対象者は、乳がん検診を受診するためには、【子どもを安心して気軽に預けられる乳がん検診会場】が必要であるとの認識であった。乳がん検診をするために子どもを預けるとすると、子どもの預け先を探す、何日も前から預け先に了解を得る・予約する、当日に子どもを預ける、検診会場に行く、検診会場から子どもを迎えに行くなどの何段階もステップを踏まないとならない。このステップが乳幼児をもつ母親にとって面倒であり大変であると認識されていた。例え検診日が決まり、子どもの預け先も前もって決まっていたとしても、当日子どもが体調を崩すと検診には行けないという状況になることも推察される。乳幼児を育てている母親にとって、子どもと切り離れた行動は困難であると考えられる。したがって、【子どもを安心して気軽に預けられる乳がん検診会場】とあるように、子どもと一緒に乳がん検診の会場に行き、自分の見える範囲内で子どもを預かってもらい安心して検診を受けるという取り組みが必要ではないかと考える。

また、対象者は【自治体から費用の補助があれば、子どものためにも乳がん検診を受けるかもしれない】と認識していた。単語頻度分析でも、《高い》《お金》などが抽出され、語のテキストデータを探索すると費用に関連した語であった。職域検診では乳がん検診

が企業によっては組み込まれていることはあるが、自治体の補助を利用した乳がん検診は、40歳以上が対象となっている。自覚症状のない30歳代の女性が乳がん検診を受けるとなると、自費診療となる。30歳代の女性は、費用の補助があれば乳がん検診を受けるかもしれないという認識でいるため、乳がんのハイリスクに該当しない30歳代の女性には、40歳になったら2年に1回の乳がん検診を受けることを勧めていくことが重要であろう。同時に、40歳になる前の年代は、月1回のセルフチェックとして乳房自己触診を適切に実施できるように、授乳以外でも乳房がある自分の身体に関心を持ち続けるよう習慣づけを促すことも重要である。授乳時には自分自身で乳房を見たり、触ったりする機会となるため、母乳育児に関わる勤務助産師や地域の助産師、乳幼児健診で関わる保健師が積極的に関わっていくことが重要である。

2. 乳幼児をもつ30歳代女性への乳房自己触診や乳がん検診受診に向けた健康支援の示唆

乳がん検診の受診年齢にあたる40歳前の30歳代の女性が乳がんを身近な健康問題として認識し関心を寄せ続けるためには、自分より高い年齢の乳がん体験者よりも、乳幼児をもつ同年代の乳がん体験者や妊娠中に乳がんを体験した方と交流する機会をもつことで、乳がんへの関心が維持されるのではないかと考える。周囲に乳がん患者がいる群は乳がん検診を受診している人が有意に多いことが示されている(河合他, 2018)。乳がんの好発年齢に至っていない30歳代の女性の周囲には乳がん体験者が少ないことが推測されるため、看護職者は乳がん体験者との交流をもつ機会を作ること、乳がん体験者と直接交流することが難しい場合には、看護職が乳がん患者の看護における経験について個人情報を守りつつ話す機会をもつことも有用なのではないかと考える。その一方で同年代の乳がん体験者や妊娠中に乳がんを体験した方との対面での交流には看護職として慎重な対応をしなければならない。乳幼児を育てながら乳がんの宣告を受けたり、喜ばしい妊娠判明から一転してのがん宣告を受けたりと厳しい体験をしていると推測される。乳がん体験者との直接交流が難しい場合は、30歳代女性の生活スタイルに合わせた形で子育て関連の様々なソーシャルネットワーキングサービス(SNS)や動画等の利用者と同年代の乳がん経験者が自ら発信するSNSや動画等の利用者がネットワーク上で知ったり、コミュニ

ケーションができたりとコミュニティサイトの活用を検討することも必要である。

乳幼児をもつ女性にとって、乳房自己触診は面倒であると認識されており、その方法についても理解に乏しかった。乳幼児をもつ女性は、母親や仕事、妻という役割を担っている者が多く、自分自身にあてる時間が少ない。乳幼児をもつ女性の生活に合わせ、乳房自己触診は自宅で手軽に行うことができ、かつ短時間で行える方法であることを周知していくことが重要である。そして、自分自身が乳房を見たり触ったりする機会となる授乳時に関わる助産師、保健師などが乳房に関心を持ち続けられるよう積極的に関わっていくことも重要である。また、乳幼児健診の会場に乳房自己触診の方法の映像を流すことや、コーナーを設けて対応する工夫が必要である。加えて女性は、子どものために死ねないという認識があることから、その母親が健康でいられることが子どもや家族の健康を守ることに繋がるものと伝え、母性に働きかけることも有用ではないかと考える。

実際に、子育て支援センターに来所する母親に対して健康教室を開催し子育てに関する内容と一緒に乳房自己触診の方法の内容を含んだ活動もある(中村他, 2009)。子育て支援センターは、子どもをもつ母親が来所しやすい場であり、生活の動線にある場でもある。子育て期にある女性たちが、乳がんの知識や乳房自己触診の方法や乳がん検診受診について正しい情報を入手する場として、今後は子育て支援センターの場を活用するのは効果的だと考える。

また、乳幼児をもつ30歳代の女性は、子どもを預けるためのハードルが高く検診や受診に行けないことも明らかとなった。健康診断を受けない理由に、「子どもを預ける環境がなかった」が上位に挙げられている(大島他, 2011)。乳幼児を育てている女性の多忙さに対して時間的なゆとりを確保することも必要である。例えば、配偶者の家事や育児の協力が時間的な確保につながる。妻の検診のため、子どもの面倒を見るために夫が職場を休むことができないシステムも問題である。ひとり親の場合も預け先を探すこと事態が、ハードルが高い。そのため、保育園や子育て支援センターに子どもを迎えにいった時に検診を受けることが出来たり、市町村で行われている検診では託児を実施したり、乳幼児と共に検診を受ける機会を設けるなど、乳幼児をもつ女性が負担なく検診を受診する工夫が求められる。

研究の限界と今後の課題

本研究は、1地域に在住する乳幼児をもつ35～39歳の女性、すなわち30歳代後半の5名の女性を対象とした結果であるため、乳幼児をもつ30歳代のすべての女性にあてはまるとは言い難い。また、対象者の乳がん検診受診回数に偏りがあったことは否めない。今後は、さらに対象者の数を増やすとともに、年代別や子どもの年齢などで乳がんに対する認識に差異があるかを明らかにしていくことが課題である。

結論

乳幼児をもつ30歳代女性の乳がんに対する認識を計量テキスト分析により明らかにした結果、上位の抽出語は<イメージ><早い><若い>等であった。共起ネットワーク分析では、【乳がんは、年齢が若いと進行が早く、発見が遅れる悪いイメージのがん】【必要性を感じるものの、仕事と子育ての両立でハードルが高い乳がん検診】【子どもを産んだことで死にたくないが、身近な存在に乳がん罹患者がいないため意識が向いていない乳がん】【方法が曖昧な乳房自己触診と見せに行くのが嫌な乳がん検診】【自治体から費用の補助があれば、子どものためにも乳がん検診を受けるかもしれない】【子どもを安心して気軽に預けられる乳がん検診会場】が抽出された。

乳房自己触診や乳がん検診の受診など健康行動の向上および健康支援として、乳幼児をもつ女性に対して、子どものためにも生きていたいという肯定的な感情でもある母性性に働きかけることは、40歳以降の乳がん検診への意思決定や受診行動、乳房自己触診行動に有効なのではないかと考える。

また、SNS等を活用し同年代で育児中の乳がん体験者を身近に感じる機会をもち、検診会場に託児を準備するなど乳幼児と共に検診ができ環境整備が必要である。女性が保育園や子育て支援センターに子どもを迎えにいった時に検診を受けることが出来たり、市町村で行われている検診では託児を実施したり、乳幼児と共に検診を受ける機会を設けるなど、乳幼児をもつ女性が負担なく検診を受診する工夫が求められる。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はありません。

引用文献

- 秋庭裕, 川端亮 (2004) : 霊能のリアリティへー社会学, 真如苑に入るー, 新曜社, 東京.
- 馬場才悟, 仙波洋子, 阿南沙織, 他 (2021) : 他学科学生と臨床で学ぶ関連職種連携実習での看護学生の学習内容ーテキストマイニングによる分析ー, 西九州大学看護学部紀要, 2, 21-26. doi : <https://doi.org/10.20830/00000139>
- 樋口耕一 (2020) : 社会調査のための計量テキスト分析 (第2版), 内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版, 京都.
- 池田智子 (2020) : 一般住民における乳がん検診受診行動の実態ー受診意図を踏まえた定期受診・不定期受診・未受診の特徴ー, 母性衛生, 60 (4), 551-559.
- 岩田綾子, 和田清, 曾根啓司, 他 (2104) : 医療機関で働く女性の乳がん検診受診率向上に向けての検討, 松江市立病院医学雑誌, 18 (1), 33-40. doi : https://doi.org/10.32294/mch.18.1_33
- 国立がん研究センターがん情報サービス (2021a) : 最新がん統計 2021. 部位別がん罹患数. https://ganjoho.jp/public/qa_links/report/statistics/pdf/cancer_statistics_2021.pdf [検索日 2022年4月31日]
- 国立がん研究センターがん情報サービス (2021b) : 最新がん統計 2021. 地域がん登録におけるサブタイプ5年相対生存率. https://ganjoho.jp/public/qa_links/report/statistics/pdf/cancer_statistics_2021.pdf [検索日 2022年4月1日]
- 国立がん研究センターがん情報サービス (2021c) : 最新がん統計 2021. がん検診受診率. https://ganjoho.jp/public/qa_links/report/statistics/pdf/cancer_statistics_2021.pdf [検索日 2022年8月2日]
- 黒田裕子, 末原紀美代 (2006) : 青年期女性の乳房セルフケアに関する行動と知識, 母性衛生, 47 (2), 397-405.
- 日下知子, 渡邊有紀 (2011) : 青年後期女性の乳房自己検診行動を妨げる要因ー看護学生を対象としてー, 川崎医療短期大学紀要, 31, 15-20. doi : [10.18928/00000178](https://doi.org/10.18928/00000178)
- の場久美, 中西伸子 (2017) : 女子大学生の乳がんの

- 早期発見行動を妨げる要因の研究, 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要, 13, 37-47. doi : <http://hdl.handle.net/10564/3366>
- 中村伸枝, 遠藤数江, 荒木暁子, 他 : 子育て支援センターを利用する幼児をもつ母親の健康・生活習慣への関心を高める看護活動, 千葉大学看護学部紀要, 31, 13-16. doi: <https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900118894/>
- 贅育子, 三宅絢花 (2014). 母性看護学実習に対する女子学生の実習前のイメージ, 実習中に感じたこと, 実習後の思い—テキストマイニングによる分析—, ヒューマンケア研究学会誌, 5 (2), 21-28. doi : <http://id.nii.ac.jp/1068/00000350/>
- 日本がん・生殖医療学会 (2021). 乳癌患者の妊娠・出産と生殖医療に関する診療ガイドライン 2021 年度版, 金原出版株式会社, 東京.
- 大高康平, 城丸瑞恵, いとうたけひこ (2010) : 手術とホルモン療法を受けた乳がん患者の心理, 昭和医学会雑誌, 70 (4), 302-314. doi : <https://doi.org/10.14930/jsma.70.302>
- 大島由美, 金山時恵 (2011) : 乳幼児を持つ母親の健康意識と予防的保健行動. インターナショナル Nursing Care Research, 10 (4), 35-44.
- Rubin, R (1984/ 新藤幸恵, 後藤桂子 1997) : ルヴァ・ルービン母性論—母性の主観的体験—, 医学書院, 東京.
- 田中登美, 森島千都子 (2020) : 就労・母親世代の一般女性の乳がんに対する認識およびその検診の受診行動に影響する要因, 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要, 16 (11), 11-20. doi : <http://hdl.handle.net/10564/3797>
- 堤聖月 (2021) : 高齢者の忘却に関する認識の特徴—半構造化面接による検討—, 神戸学院大学心理学研究, 4 (1), 13-22. doi : <http://doi.org/10.32129/00000227>
- 山本美由紀 (2020) : 乳がんに対する大学生男女の知識と意識行動の実態調査, 日本健康医学会雑誌, 29 (3), 343-353. doi : https://doi.org/10.20685/kenkouigaku.29.3_343
- (受付年月日 : 2022 年 9 月 17 日 受理年月日 : 2022 年 11 月 27 日)

< Research Report >

Characteristics of Perceptions of Breast Cancer among Women in Their 30s with Infants: A Quantitative Text Analysis

Wakako Yachi¹⁾, Yuko Kichiya²⁾

1) Faculty of Nursing, Iwate Prefectural University,

2) Faculty of Nursing, Iwate Prefectural University (formerly)

Keywords : Breast cancer, Perceptions, Infants , 30s women, Textmining